ワイルドアームズ５～the out of infinity～

あきかな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ワイルドアームズ５～ｔｈｅ　ｏｕｔ　ｏｆ　ｉｎｆｉｎｉｔｙ～

【Ｎコード】
Ｎ１５５４Ｈ

【作者名】
あきかな

【あらすじ】
はいすいません。大風呂敷広げたら纏められませんでした。今後更新予定もないです。
本当にっ本当にっごめんなさい。あ、石を投げないで。
次の小説は身の丈にあったレベルにします。こんな中途半端なものを読ませてすいませんでした。
まぁそれでもこんな短いレベッカＳＳでも読みたいという奇特な方まで止めはしませんが、なるべくならもう封印したい……。
アヴリルを追って一緒に過去に戻ってしまったディーン。アヴリル

を時空のループからとき放つために紡がれる……これはそんな物語。

COUNT――・1

「アヴリルッ！」

肺に残っている最後の空気を吐き出し、ディーンは声を上げた。
塔の中を走り続けた体が悲鳴を上げ、意識が遠のきそうになる。
それをなんとかつなぎ止め言葉を続けた。

「よか……った、間にあった」

「ディーンッ！　なんでここにいるのですかッ！？」

石造りの祭壇の上、腰まで届く銀髪をひるがえしアヴリルが叫んだ。

「だってアヴリル、泣いてた、じゃないか。……そんなの、ほうっておけないだろ？」

ディーンの言うように、透き通る様な白い頬には涙のあとがあった――。

緑色の薄手の生地に、金のししゅうがほどこされた服を身にまとい、太古の遺跡を思わせる祭壇の上に立つ。
その青い瞳には泣きはらしたあとがあり、自分の身を犠牲にしようとする少女。

その少女、アヴリルの姿は一枚の絵画のようだった。

第０章『例外と錯覚の輪』

時は少し前にさかのぼる。
アヴリルとの出会いから始まった長い旅の末。
怨念に取りつかれたベルーニ族を倒し、地上に帰ってきたディーン達。

祖先を同じくし対立していた人間とベルーニ族。だがこれからは両種族が共に手をとり生きていこう。
中心に塔が立つ小高い丘の上で、ディーンは民衆にそう宣言していた。

そんなディーンの姿を見つめ、少し寂しそうにアヴリルがつぶやく。

「もうすぐですね……」

「……アヴリル、どうしたの？」

健康そうな足を太モモまで出したショートデニム、袖を捲り上げたシャツの上にはピンク色をしたウエスタンベスト。
見るからに活発そうな赤毛の少女がアヴリルに声をかけた。

「ごめんなさい、レベッカ。これからが大変だと思って、ちょっと

考えごとをしていました」

「うん、これからが大変だね。ディーンはアタシの気持ちさえ、まだ気づかないニブちんだしさ――」

そう言ってレベッカは手を後ろでつなぎ、二つの長いおさげを揺らしてそっぽを向く。

少しいじけた表情をしていた。

一緒に旅をして、ますますディーンの事が好きになったレベッカだが。

いい雰囲気になっても照れくささが先に立ち、つい天の邪鬼な事を言ってしまう。

アヴリルというライバルもできて、なかなか気持ちを伝えられずにいた。

と、そんな会話を後ろでしている事には気付かず、ディーンは民衆に語りかけている。

その時、急に辺りが暗くなり、空には巨大なドス黒い霧が広がっていった。

そこから、この世の全てを呪うような、不気味な声が響いてくる。

「人間とベルーニ族が手をとりあうだと？　そんな事は我が許さぬ、両種族とも滅ばしてやろう」

空に浮かぶ黒い霧がそう言って薄く笑い、塔に吸い込まれる様に

消えていった。
　すると、ＴＦシステムと呼ばれる塔にエネルギーがかよい、紫の光を放っていく。
　その光景を見たディーンは、慌ててアヴリル達のところにかけ寄る。
　遠い昔にベルーニ族をひきいてＴＦシステムを作ったというアヴリル。
　何か知っているかと思い問いかけた。
「アヴリルッ！　ＴＦシステムが動き出してるッ！　あの怨念が稼働させたのか？」
「いいえ、稼働させたのではなく、自らが塔と一体化ようとしているのです。そして星の中心まで張り巡らされているＴＦシステムをすべて爆発させ、ファルガイアを破壊しようとしています」
　その恐ろしい話にレベッカが驚く、
「ファルガイアを破壊ッ！？　す、すぐに止めないとッ！　ディーンッ！」
「ああッ！　ＴＦシステムを止めればいいんだろッ！　すぐに向かおうぜッ！」
　焦るディーン達。だが、アヴリルは静かに首を降り、
「いいえ、もはや何をしても無駄です。こちらから手を加えることは、爆発の時間を早めるだけでしかないでしょう」

「なッ！？」

「安心してくださいディーン。必ずわたくしが、ＴＦシステムを停止させますから」

「わかったッ！　それじゃ、オレたちはどこに行けばいいんだッ！？」

こうしてはいられない、と焦るディーンに、アヴリルが真剣な眼差しで告げる。

「今のＴＦシステムは、１万２千年前と同じく次元の乱気流を誘発しています。いま塔の中に入ると、次元の果てへと飛ばされる危険がありますから。わたくしひとりで向かいます」

「なッ！　何バカなことを言ってんだッ！　アヴリルだけにそんな危険なことはさせられないッ！　オレも一緒に行くぜッ！」

ディーンは心配して止めようとするが。

やっぱり、と言う顔をしてアヴリルは少し嬉しそうに話す。

「ふふふ、ディーンならゼッタイにそう言うと思っていました」

しかし、すぐに真剣な表情にもどり、

「ですが、ここから先は本当に危険なのです」

「そんな事は関係ないッ！　アヴリルひとりだけ、そんな危険な所に行かせられるもんかッ！」

「わたくしなら大丈夫です。必ずまた、ディーンに会えますから。それだけは、絶対に「約束」します」

「そんな約束よりも、オレはアヴリルを――」

「お願い、ディーン。わたくしの言うことを聞いて――」

「ッ……」

そう話すアヴリルの顔には覚悟があり、何を言っても聞かないと思った。

心の中がざわつき、言葉では言い表せないような、つかみようのない不安がディーンを襲う。

だが、アヴリルの瞳には一歩も引かないという強い意思が宿っている。

心配だから、という理由だけでは止められはしないだろう。

ディーンはしぶしぶ言うとおりにする。

「わかった。その代わり、ＴＦシステムの前までは一緒に行く。ここにいる、みんなと、な」

「はい――……それでは行きましょう。」

……塔の前には今まで旅を同じくしてきた仲間達がいる。

仲間と別れ。これからひとり、またあの長い眠りにつくと思うと

胸が苦しくなった。

しかし、ここにいる仲間達やディーンのためにも行かなければいけなかった。

「それではみなさん、わたくしは行きます。次元の乱気流に巻き込まれる危険性がありますから、この中には絶対に入らないで下さい」

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｔｉｎｕｅｄ……

COUNT――・2

＜

ファルガイアの生態系さえ改造してしまうという、ＴＦシステムと呼ばれる恐ろしい塔がそびえ立っている。
不気味な鉄色をしたそれは紫の光を放ち、怨念に取りつかれていた。

ひとりで塔の中へ行くと言うアヴリル。
ディーンは仲間達と見送りにきていた。

「アヴリル……」

何かを話しかけようと口を開くが。言葉は浮かばず、ディーンは名前だけを声に出した。

「ディーン、今までありがとう。こんなこと言ったら怒られるかもしれませんが、あなたと出会ってから今日まで、本当に楽しかったです」

「やめろよ、これでお別れみたいな挨拶ッ！　そんなこと言われたら……、ひとりで行かせることなんかできないだろッ！」

やっぱりオレも一緒について行こうか、そうディーンが切り出す前にアヴリルが話しかける。

「そうですね。ごめんなさい。だって、またきっと会うって『約束』しましたものね」

「あぁゼッタイだッ！　オレのゼッタイは何よりも強いんだろッ！？」

こぶしを握りしめるディーンに、アヴリルはその青い瞳を優しくほそめ、にっこりと笑った。

たとえもう会えなくなっても、自分の笑顔を覚えていてほしい。

そんな顔をしてディーンに微笑みかける。

「ふふふ。はい、絶対の『約束』です」

そう言って笑うアヴリルの笑顔は、ディーンの思考を止めるのに充分なほど魅力的だった。

「アヴリル……」

アヴリルは一度、瞳を閉じて。

言葉では伝えきれないほどの想いを胸に抱く。

本当はディーンと別れたくはない。

だが、氷の女王として過去に犯してしまった罪を償うため。

なにより、この世界の、ディーンの命がかかっている。

叶う事はない望みを抱く事はできない。

アヴリルは静かにうなずき。強がりと覚悟を瞳の奥に秘めて、ディーンを見つめる。

「最後に、ディーンに伝えたいことがあります。聞いてくれますか？」

「オレに伝えたいこと？　あぁ、聞かせてくれ」

そして、ディーンに最後の笑顔を見せた。

「わたくし……、出会った時からディーンのことが大好きでした。……そしてこれからもあなたのことが大好きですッ！　だから再びあなたに会いに行きますッ！　だから……ッ！」

そこまで言って、瞳からあふれそうなモノを隠すようにアヴリルはかけ出して行く。

それは、幾千の輪廻が生んだ奇跡だったのかもしれない……。

その青い瞳には、氷が溶けだしたような透明な涙が流れていた――

「アヴリルッ！」

その涙を見た瞬間、ディーンの足は勝手に動きだしていた。

しかし、後を追って走り出そうとするディーンをレベッカが必死な声で止める。

「ダメッ！　ディーン行っちゃダメぇぇぇぇ！」

「止めるなレベッカッ！　あんな表情のアヴリルをひとりで行かせるわけにはいかないッ！」

「アヴリルはそれを望んでないのッ！　わかって、ディーンッ！」

「アヴリルは望んでない……」

その言葉に動き出した体が止まる。

「アタシだって……アタシだってアヴリルを行かせたくない……だって、スゴくイヤな予感がするんだもん……でも、アヴリルが望んでないんだから……仕方、ないじゃない――」

普段の元気なレベッカからは想像もできない、とてもツラそうな表情をしていた。

ディーンはその顔を見て。レベッカが今どんな気持ちでいるか少しだけわかった。

いつもはレベッカを見ていても、何を考えているかなんてわからない時のほうが多い。

だが、不安を押しころしアヴリルを困らせないようにガマンしている姿は、昔の泣き虫なレベッカによく似ていた。

この旅の中で親友になったレベッカとアヴリルだ、心配していないはずはない。

それでもアヴリルは望んでいないから、と気持ちを抑えている。

自分が追っていってもアヴリルやレベッカを困らせるだけだ。

そう頭ではわかっていた。

しかし、最後に見せたアヴリルの涙に、どうしようもないほどの熱い想いが込み上げてくる。

「でもッ！　それでも俺はッ！　アヴリルに泣いてほしくないッ！」

泣き出しそうなレベッカをほうって行くのは心配だったが、体は走り出す。
いま追いかけなければ、アヴリルはずっと泣き続けてしまう。そんな衝動にかられていた――

「ディーンッ！　待ってッ！」

静止も聞かず走り出す後ろ姿にレベッカの手が伸びるが、ちからなく腕を下ろしてしまう。

アヴリルに泣いてほしくないというディーンの言葉を聞いて、もう止められないと悟ってしまった。
うつむき、その赤毛に隠れた瞳からは今にも涙があふれそうになる。

かつてレベッカがまだ泣き虫だった幼い頃、泣いているといつもディーンは助けにきた。それこそ、なにもかもほっぽりだして助けてくれた。
ディーンは泣いている女の子をほうってはおけないのだ。

このまま自分まで泣き出したらディーンはどうするのか。一瞬そんな考えがレベッカの頭によぎったが。
そんな事をしてディーンの気持ちをさぐろうとする自分を卑怯だと思った。
先ほどディーンを止めてしまったのも、半分はディーンまでいなくなってしまうのが耐えられなかったからだ。

レベッカはそんな自分が嫌になり。

なにより、自分が泣いてもディーンは止められない。そう思って必死に涙をこらえる。

それでも、そう思うからこそ胸が押しつぶされそうになり。ディーンへの気持ちが心をかきみだす。

アヴリル追って塔の中へ消えていくディーン。

レベッカはあふれる想いをおさえきれず。その背中に向かって叫んでしまった。

「わたしも……、わたしもッ！ディーンの事が大好きだからッ！！ずっと、ずっと大好きだったんだからぁぁぁぁ！！！」

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｔｉｎｕｅｄ……

COUNT――・3

不気味な外観とはだいぶ雰囲気が違い、塔の中は古代の遺跡を思わせた。
辺りからは、この塔に取りついた怨念のうめき声の様なものが聞こえてくる。

そんな中をアヴリルを追ってかけ抜けるが、

（レベッカも泣いてたのか？）

先ほどおいてきてしまったレベッカの声が耳に張りついていた。

レベッカの涙声を聞くのはずいぶん久しぶりだったが、聞き間違えるはずはない。
幼い頃のレベッカはよく泣いていて。
あの声を聞くと、いたたまれなくなる。

瞳から大粒の涙をこぼし、わんわん泣くその泣き顔を、なんとか笑顔にしてあげようといつも頑張っていた。
そんなレベッカもいつからか泣かなくなり。
少し寂しいとも思ったが、いつまでも子供ではないのだと思っていた。

しかし、さきほどのレベッカの声はとても悲しそうで。
昔のレベッカのおもかげが、かさなる。

（レベッカ……。でも今はアヴリルを止めないとッ！）

塔の頂上に向かうにつれ、怨念達の声が強くなる。
頭からレベッカの事が離れなかったが。
とてつもなく嫌な事が起こる。そんな予感がして、一刻も早くアヴリルの元へ行かなければと思った……。

……ディーンに気持ちを伝え、アヴリルは涙を流しながら塔の中をかけ抜ける。

（わたくしが泣いているとわかれば、心優しいディーンのことですからきっと心を痛めてしまうのでしょうね……）

ディーンには泣き顔を見せたくはなかった。
なんとか悲しい気持ちを隠そうとしたが、あまり上手くいかなかっただろう。

心配をかける事をとても申し訳なく思うが。もう、あやまりにはいけない。
もう一度会えるのは1万2千年後だ。

（また会えるまでの、あなたのいない時間は、わたくしにとってなによりの罰なのでしょうね……）

これからひとり過去に戻り、ディーンとの記憶を封印してコールドスリープの中で眠りにつく。
そう思うと、ディーンが恋しくてどうしても涙が止められなかっ

た。

何度経験してもこの瞬間ほどツラい時はなかったが、こんなに泣いたのは初めてかもしれない。

それとも、数えきれないループの中で忘れてしまったのだろうか。

（でも、あなたとの思い出はひとつも忘れたくありません。あなたがくれたぬくもりも、ずっと、ずっと覚えていたい……）

ディーンと再会し抱きかかえられた時は、記憶を失っていてもそのぬくもりに涙が流れた。

（また、ディーンに会えば泣いてしまうのでしょうね）

ＴＦシステムをコントロールする部屋までたどり着き。

溢れる涙をその細い指でぬぐいながら、アヴリルはそう思った……。

祭壇の上まで進み、空中に浮く石板に取り付けられたコントロールパネルを操作する。

もうすぐ次元の乱気流が起こるだろう。

（終わりの時間が近づいてきたようですね）

「さようなら、大好きなディーン……」

そう言ってコントロールパネルに最後のキーを打ち込もうとした時。

突然、背後から声が聞こえた――。

「アヴリルッ！！！」

その声にアヴリルは驚き、振り返った。

「ディーンッ！　なんでここにいるのですかッ！？」

「だっ……て、アヴリル。泣いてた。……アヴリルが泣かないためならなんだってするってッ！　そう言ったじゃないかッ！」

「ディーン……」

その言葉を守るために自分を追ってきてくれた。

覚悟が揺らぎそうになる。

だが、その考えを否定するように首を振り。

「ディーンッ！　ダメですッ！　すぐに戻ってくださいッ！　ここにいては、あなたまで巻き込まれてしまいますッ！」

「イヤだッ！」

「ディーンッ！　お願いですッ！」

「巻き込まれるって、アヴリルはどうなるんだッ！？」

「ッ！……」

思わず話してしまったことを追求され、アヴリルは言葉につまる。

「よくわからないけど、オレはアヴリルがいなくなってしまうのはイヤだッ！」

「ディーン……。ダメです、わたくしが過去に戻らなければ、ディーンやみなさんの命まで危険にさらしてしまいます。」

「過去に？　……過去に戻るって、なんとかならないのかッ？！」

アヴリルは一瞬考え、

「どうにもできません。……わたくしが過去に戻らなければ、わたくしがディーンと出会うという歴史も変わってしまいます。そうなれば、今まで助けてきた人達や暴走しているＴＦシステムもどうなってしまうかわかりません」

「でも、アヴリルはひとりで戻るのはイヤなんだろッ！？」

「……いえ、わたくしが過去に戻りディーンと出会う、その出来事を無くしてしまうわけにはいきません。そうなればタイムパラドックスが起こり、この世界自体を危険にしてしまうでしょう」

「じゃあッ！　オレもアヴリルとッ！」

「ッ……」

その優しさが、アヴリルの心を締め付ける。

（ディーン、ほんとうにあなたは……）

本当はこのまま、ずっと一緒に未来を生きていきたかった。

それは願ってやまない、だが許されない事だ……。

「ダメですッ！　次元の乱気流に巻き込まれても、ディーンはどうなってしまうかわかりません。それに、レベッカをひとりで残してしまうのですか？」

「うッ……。くそッ！　どうすればいいんだッ！」

たしかに、レベッカをひとりにもできないと思い。
なんとかならないのかとディーンは頭を抱える。

「……ディーン。あなたは『宝物とは頑張る力になるもの』と言っていましたね」

「宝物？」

いきなり話しが変わり驚いたが、何か意味があるのだろう。
そう思い。ディーンは瞳を巡らせ、

「……ああ、言った」

その答えに、アヴリルは胸の前で手を握りしめ。
凛と響く、力強い声で語る。

「ディーン、あなたと共に過ごした時間は、わたくしにとって何よりの『宝物』なのです。その宝物があるから、わたくしは頑張れる……だから、しばらくのお別れはツライですが、再び宝物を得るため頑張れるのです」

「アヴリル……」

「ですから、ここはわたくしにまかせてディーンは戻ってください。」

その時、コントロールパネルから、けたたましい警告音が鳴る。

「ッ！　なんだッ！？」

「もう時間がありませんッ！　戻ってくださいッ！」

そう声をかけ、アヴリルはコントロールパネルに目をやる。

ＴＦシステムは暴走寸前だった。

慌てて停止キーを押し、

「ディーンッ！　ここから少しでも離れてくださいッ！　早くッ！」

そう叫ぶがすでに遅い。

辺りが光に包まれ、次元の乱気流が起こった……。

Ｔｏ　Ｂｅ　ｃｏｔｉｎｕｅｄ……

COUNT――1

遠くで銃声が聞こえた。
辺りの鳥たちが驚き、空に飛び立つ。
夢の遺址と呼ばれるゴーレムの発掘現場。
警備のおじさんが猟師のまねごとをしていた。

Ｔｈｉｓ ｓｔｏｒｙ ｉｓ ｒｅｃｏｒｄ ｏｆ ｔｈｅ ｈｕｍａｎ ｗｈｏ ｃｈａｌｌｅｎｇｅ ｆｉｇｈｔ ｔｏ ｔｈｅ ｗｏｒｌｄ，

銃声にふり返り。いつもの事だ、と気にせず発掘現場に向かう。

ｔｈａｔ ｓｅｐａｒａｔｅｓ ｗｉｔｈ ｔｈｅ ｐｅｒｓｏｎ ａｎｄ ｔｈｅ ｐｅｒｓｏｎ.

遥か昔、文明が栄えていた頃に作られたゴーレムと呼ばれる機械人形。
今ではベルーニ族がその権力を維持するため世界中で人間に発掘させていた。

しかし、こんな田舎にある廃れた発掘現場には管理者であるベルーニ族の目も届かない。
警備のおじさんも真面目に仕事をしている様子はなかった。

Ｊｕｓｔ ａｎ ｏｒｄｉｎａｒｙ ｂｏｙ ｆｒｏｍ ｔｈｅ

ｂｏｒｄｅｒ，

今から遺跡を掘り返そうと、ゆうゆうと歩いていっても止められはしない。

ｃｕｌｔｉｖａｔｅｄ　ｓｏｕｎｄ　ｍｉｎｄ　ｉｓ　ｔｈｉｓ
ｄｅｓｏｌａｔｅ　ｗｏｒｌｄ．

すでにガラクタしか出なくなった発掘現場。
しかし、ゴーレムハンターを目指すディーンはやる気まんまんに入って行って遺跡に大穴を開けて帰っていく。
人がいれば迷惑きわまりないのだが。もう他に立ち入る人間もいないので、おじさんは別に気にしていなかった。

Ｈｅ　ａｃｈｉｅｖｅｄ　ｉｎｄｅｐｅｎｄｅｎｃｅ　ｂｙ　ｌｏｖｅ，ｃｏｎｒａｇｅ　ａｎｄ　ｈｏｐｅ．

これから遺跡を掘り返そうと、４本の足で土を踏みしめ――

ｔｈａｔ　ｈｉｓ　ｓｔｏｒｙ　ｌａｔｅｒ．

犬、が発掘現場に向かっていても。

ワイルドアームズ５～ｔｈｅ　ｏｕｔ　ｏｆ　ｉｎｆｉｎｉｔｙ～
第１章『巻き込まれた２人』

「うぐッ」

その犬に踏まれ、道ばたで意識を失っていたディーンがおかしな声を上げた。

犬は驚いて口にくわえていたモノを落とし、どこかへと去ってしまう。

「……アヴリルッ！　ってここは？」

ディーンの意識はすぐに目覚め、アヴリルを呼ぶが……。

先ほどまで一緒にいたはずのアヴリルがいない。

それどころか自分はどこかの山道にいるようだ。

「えっと……、どうなってるんだ？　ってＡＲＭがないッ？！　なッ！？　オレの持ち物が何もないじゃないかッ！」

上着に違和感を感じ探ってみると、アヴリルからもらった大切な銃がなかった。

ついでに、ポケットがやけに軽い気がして見てみると、持ち歩いていた道具もない。

ひとり言で色々ツッコむ様子は、はたから見て少し変に見えるが。

これも、昔からカポブロンコの里でトニーじいちゃんと漫才の練習をした成果……、かもしれない。

状況をあまり把握できないディーンは、とりあえず辺りを見回してみる。

そういえばアヴリルが、巻き込まれると飛ばされる、とかなんとか言っていたのを思い出した。

「ッ！　……ここはカポブロンコの近くか？」

すぐ近くに見覚えのある景色が見えた。

小さな白い岩山をくり抜いた入り口、旅立つ前によく行っていた発掘現場だ。

それならここは自分の住んでいた村の近く、という事になる。

さて、どうしようか。と考え、下を向く。

ディーンの足元には、犬がくわえていた本が落ちていた。

「なんだこれ？」

思考を一旦中断して、なんの本かと思い拾って読んでみる。

（春風の中、深き眠りにつくは。密色の髪の乙女……。白馬の王子との再会を夢見て……）

「……。ってレベッカのポエムノートじゃんッ！」

見た目はハードカバーの本のようだが。

その中身は、レベッカの乙女心が存分に駆使された詩を綴った。

とても人には見せられないメルヘンチックノートだ。

読んだのがバレたら烈火の如く怒りだすだろう。

以前に同じような事があった時はポカスカ殴られた。

かといって、ここに置いていく訳にもいかない。

「しょうがない……。届けてやるか」

大切にしてるのに何度も無くすなよ、と少しあきれながらノート

をポケットにしまい込む。
ノートがここにある理由はレベッカの不注意、という事ではなかったのだが。

（とりあえず、誰かと連絡を取りたいけど。テレポートオーブもないし……。ここからならカポブロンコが近い、トニーじぃちゃんのところに行くかッ！）

そう思ってすぐ走り出した。

（アヴリル……、無事でいてくれよ……）

アヴリルを止めに塔の祭壇まで行ったが、あの後どうなったかよく覚えていない。
早く仲間と会ってアヴリルが無事なのか確かめたかった。

「おお、ディーンじゃないか。みんな探しておったんじゃぞ？」

トニーじぃさんの家まで着くと、彼はいつものように機械をいじくりまわしていた。

こんな片田舎にいるが、昔は超一流のゴーレムエンジニアをしていたらしい。
ディーンが前の旅で自分のゴーレム、アースガルズを手にいれてからはその整備をまかせていた。
ゴーレムの中でも超一級品のアースガルズを整備するくらいなのだから、その腕は確かのようだ。

「じぃちゃんッ！　それより大変なんだッ！　アヴリルがどうなったかわからなくてッ！　レベッカたちと連絡を取りたいんだッ！」

いてもたってもいられない、という様子で矢継ぎ早に話す。

だが、返ってきたのはディーンの期待した返事ではなかった。

「アヴリルとな？　その名前をどこで？　というか、おぬしアヴリルの事を知っておるのか？」

「知ってるかって、じぃちゃんも知ってるだろッ！？　アヴリルが無事なのか早く確かめないとッ！」

「まぁ待て、落ち着いて話すんじゃ。言ってる事がよくわからんぞ？」

トニーじぃさんに言われ事情を説明したが、話すにつれて、なんだかとんでもない事になっていった。

ディーンも難しい事はあまりよくわかっていないので、要約すると。

次元の乱気流に巻き込まれ過去に戻ってしまったらしい。

らしい、というのは。トニーじぃさんもゴーレムエンジニアをしている時にベルーニ族に聞きかじった程度だからだ。

ＴＦシステムや次元の乱気流については専門外だった。

「まぁ、にわかに信じられる話しではないが。そう考えるのが適当じゃろうな」

意外とあっさりタイムスリップなんてモノを受け入れるトニーじぃさんだが。
アヴリルが心配で気が回らないディーンは、一言もツッコんではくれなかった。

「そっか……。アヴリル……」

いまいちよくわからないが、結局はあの時アヴリルを助ける事はできなかったみたいだ。
1万2千年も前の大昔に、ひとりで行かせてしまったかと思うと胸が痛んだ。

アヴリルは「頑張れる」と言っていたが、別れ際に泣いてしまうほどだ。
一緒に巻き込まれてしまった自分を心配して、またひとりで泣いているかもしれない。

「くそッ！　……。」

落ち込んでしまったディーンに、トニーじぃさんは励まそうと声をかける。

「まぁ、あれじゃの。それなら今からアヴリルを助ける事はできるんじゃないのかの？」

するとディーンはうつむいて、力を溜める様に体が震え始めた。
じゅうぶん力を溜めたあと、突然うでを天に突き上げてガッツポーズをした。

「そうだッ！　そうだよッ！　まだ終わったわけじゃないんだッ！

これからアヴリルを助ける事だってできるッ！　よっしゃあッ！
やるぞッ！」

簡単に励まされるディーンに、トニーはじぃさん少し驚くが、

「あ、ああ。そうじゃの。それで、これからどうするかは決まっておるのか？」

「え？……」

トニーじぃさんの的確なツッコミにディーンが固まる。
さっきツッコんでくれなかった仕返しだろうか。

「え～……と。……これからどうしたらいいんだ？」

とうぜん、ディーンは何も考えていなかったようだ。
たっぷり考えても何も思いつかない。

「とりあえずは、おぬしが未来から来たという事を回りにバレないようにする事じゃな。それと……。そうそう話し込んですっかり忘れておったわい」

こほん、とセキをつき。昨日の晩御飯を思い出したような気軽さで、トニーじぃさんは言った。

「ディーン、おぬし3日も行方不明になっておったんじゃ。レベッカが心配しておったぞい」

「え……」

せっかくやる気をとりもどしたディーンだが、固まってばかりだった。

To Be cotinued……

COUNT――2

（ここでネジを拾わなかったら、ゴーレムハンターを目指してなかったのかもな……）

子供の頃にゴーレムのネジを拾い。アヴリルと出会い、旅立つきっかけにもなった場所。

ディーンは、なんともいえない懐かしさを感じた。

レベッカの両親に、レベッカは昨日から自分を探して神々の砦に行っている、と聞いて。彼女を追ってきた。

白い岩肌におおわれた斜面には濃い緑がおいしげり、どこか幻想的な雰囲気が漂う。

豊富な水源にめぐまれた数多くの滝がそれに拍車をかけていた。

そんな天まで続くような山の頂。

その風景は、神々の砦と呼ばれるにふさわしいだろう。

「レベッカ怒ってるんだろうな……」

そんな山の中を歩きながらレベッカの事を考える。

ここを探しにきてるという事は。魔物に襲われでもして、ケガして動けないと思っているのだろうか。

思えば、レベッカとは子供の頃から1日も顔を合わせなかった日

は無いような気がする。
小さな村だったし、年の近い子供はレベッカしかいなかったので
いつも二人で一緒にいた。

お互い成長してからも、別に毎日会う理由もなかったのだが。
むしろ会わない理由のほうがなかったので毎日顔を合わせていた
気がする。

それが3日も行方不明ではさぞかし心配をかけただろう。

たまに現れる魔獣を愛用のブラックフェンリルでなぎ倒し。
白い岩肌が露出した山道を奥へ奥へと進んでいく。

ディーンはブラックフェンリルなんて大層な名前をつけているが、
その実はただのスコップだ。
弱い部類とはいえ一般人には恐ろしい魔獣。
それを考え事をしながらスコップひとつで適当にあしらえるのは、
前の旅でディーンがそれだけ成長したあかしだろう。

（ポエムノートも返さなきゃいけないし……。今度はゴーレムでも
ぶん投げてきそうだな……、こわッ！）

昔ここでコブシ大の石を投げつけられた事を思い出し、ひとりで
漫才しているディーン。
あれは本気で当てる気だったぜ、とか思っている。
そんな事を考えながら、自分の倍はあろうかというゴリラのよう
な魔獣を軽くいなし、脳天にスコップを叩き込む。

魔獣がいても、弱すぎてまったく緊張感が出ない。
ノンキに構えてレベッカを探すディーンだが、事態は思っていた

より深刻だったようだ。

山の中腹にあるドーム状の大きな洞窟まできた。
天井は遥か上のほうまであり、大きな“ほこら”のようになっている。

そこでレベッカを見つけたが、どうやらこの時代でも泣かせてしまったようだ。

「ディーン……、ここにもいないなんて……。もうディーンとは会えないのかな?……」

ほこらの天井からまばらに差し込む日の光。
その先に、まるで自分の半身を置いてきてしまったような視線を向けていた。
凛とした2つの碧眼から涙が溢れていたが、まだあどけなさが残る泣き虫なレベッカとは違った。

いなくなってしまった想い人を思う、愁いのある眼差しを宙に向けて。
頬を伝う涙は、差し込む陽光を受けて朝露のように輝いている。

虚ろになってしまった胸に手を当てて祈るようにたたずむその美しさは、まだ幼さが残るレベッカの、女性としての成長を表していた。

「レ、レベッカ……」
「え？……」
こがれていた声が聞こえた気がして、流れるように振り返るレベッカ。
頬に流れる涙が宙に舞い、光を反射する。
その視線の先には、少しほうけた顔をしたディーンがいた。
「あ、あの……」
「ッ！　ディーンッ！　……ど、どこ行ってたのよッ！　心配したんだからねッ！」
待ち焦がれた彼が見つかったが。
泣いてるところを見られた？　ていうか、いつから見てたの？
と恥ずかしくなり、レベッカは頬を染めていく。
そんなレベッカに、ディーンは本気で悪かったとあやまり駆け寄ってくる。
「ごめんッ！　泣くほど心配してたなんて。ほんとにごめんッ！
レベッカ、大丈夫か？」
「なッ！　泣いてないわよッ！」
あわてて涙をぬぐい、泣き顔を見せないようにそっぽを向く。
そんな事をしてもばっちり見られただろうし、赤くなっている瞳は変わらないが。

「レベッカ、ほんとにごめんッ！　もう勝手にいなくなったりしないからッ！」

そう言って自分の瞳を見つめ、肩をつかんでくる。

ディーンの声を聞くとホッとして、その手から伝わるディーンの存在がこころを暖かくする。

その恋慕が溢れ出してしまうかのように、せっかくぬぐった頬を、また一粒の涙が流れ落ちていった。

「ほんとに――。もうディーンがいなくなったのかと思ったんだからッ！」

そう言って胸に飛び込み、ディーンの服を握り締める。

レベッカは子供の頃のようにわんわん泣いてしまった。

しばらくして泣きやんだレベッカは、まだディーンの胸に抱かれていた。

高ぶった感情は落ち着いて、ディーンに抱かれているのが恥ずかしくなってくる。

だけどもう少しこのままで、とディーンの胸の中を堪能する。

その胸の中にいると心が満たされていく。頭がぽわぽわして、とろけてしまいそうだ。

ディーンがいなくなってしまったかという不安も。
ディーンに甘えてしまう照れくささも。
そんな事は全てどこかに飛んで行ってしまい、そのぬくもりが自分をとりこにする。

なんて幸せな時間なのだろう、もうずっとこのまま抱き締めていてほしい。
そう思っていたが、

「レベッカ――」

「ッ！　忘れてッ！」

ディーンに話しかけられて、とっさに腕を突き出し、その胸を押し返した。

そのまま抱かれていれば、いいムードになっていたかもしれないが。
ふやけた頭ではそんな事にまで考えがおよばず、体が勝手に動いてしまった。

天国へと旅立っていた気分がだんだんとはっきりしてくる。

「も、もう大丈夫だから。今のことは忘れなさいッ！」

今まで生きてきてこんなに恥ずかしい事があっただろうか。

ディーンに抱き締められてみたいと思っ事もあったが。
実際に抱き締められてみると。こんな幸せな事が世の中にあったのか、と思わせるほど自分の心をわしづかみにした。

ついさっきまでの、そんなメロメロになってしまった自分を思い出すと恥ずかしさが込み上げて、まともにディーンの顔が見れない。

しかし、瞳をそらすレベッカに、ディーンはいきなり真剣な表情をして、

「ッ――」

「え？――」

自分を抱き込んで押し倒してきた。

「え？　ちょッ！　ダメッ！」

ちょっと、ダメよッ。こんなところでそんな……、なんて思ってしまうレベッカ。

急に押し倒されて完全にパニックになっていた。

だが、胸の前で握りしめた手はそのままで、抵抗はしない。

そんな、このままディーンと……、とか考えてしまっている。

自分はどうなってしまうのか、そう思うと胸が破裂しそうになり、顔がありえないくらい火照ってくる。

レベッカはギュッと瞳を閉じて、ディーンが次に何をしてくるのか、不安と期待を織り混ぜて待ち望んだ。

しかし、そんなレベッカの望みは叶えられなかった。

人の１０倍もあろうかという巨大なゴーレムの腕が、洞窟の天井を突き破り、辺りに凄まじい轟音を響かせて落ちてきた。

土煙が舞い上がり、二人を襲う。

「――レベッカ、大丈夫か？」

「う、うん。ありがとう」

まだ抱き込まれたままなので顔をが近い。

レベッカは、ほうけてディーンを見つめ返す。

「よかった。ちょっと見てくるから、レベッカはここにいてくれよ？」

「う、うん。わかった」

レベッカに声をかけ、ディーンは落ちてきた腕を見に行ってしまう。

その背中を見送り、のそのそと起き上がる。

（び、びっくりした。なんか、わたしすごい事考えてたような……）

びっくりしたのはもちろん突然落ちてきたゴーレムの腕のほうではない。

ディーンに急に押し倒されて乙女心を揺さぶられ、危うく乙女ではなくなってしまうかと思った事のほうだ。

（はぁ……、わたしなにやってんだろ。ディーンに泣いてるところ見られちゃうし……）

夢のような時間から目覚めてしまったレベッカは、額に手をあてて首を振り、自分のあまりの失態に少し呆れた。

To Be cotinued……

COUNT――3

空から落ちてきた巨大なゴーレムの腕の前まで、ディーンは駆け寄ってきた。
その手に包んだアヴリルを守るように、ゴーレムの拳は優しく握られている。

（アヴリル……）

ディーンは自分の身の丈ほどもあるゴーレムの拳を叩き、衝撃を与えた。
すると、自然にゴーレムの手が開いていく。
その中には、気を失い、２丁のＡＲＭを大事そうに抱えたアヴリルがいた。

開いた手の平を滑り落ちてくるアヴリルを抱き止める。

その体は見た目以上に軽く。
こんな華奢な体で今まで頑張ってきたのかと、切なくなった。

自分にとってはつい昨日まで一緒にいた。
しかし、アヴリルにはどれだけの時を経た再会なのか。
その苦しさは、きっと本人しかわからないのだろう。

自分との思い出を忘れ、きっとまた記憶喪失になっている。
なんともいえない空虚な感じがして。アヴリルもこんな思いをし

ていたのかと、思わず抱き締める手に力がこもった。
その思いに揺さぶられたように、目を閉じていたアヴリルはゆっくりと目をさます。
「う、うぅ――」
「大丈夫か？　オレはディーン、キミは？」
トニーに言われたように初めてをよそおう。
「ジョニー……、ジョニーアップルシード……」
「男の名前みたいだけど、それがキミの名前なのか？」
「いいえ……、でも、たいせつなものです」
その大切なモノを懐かしむように、アヴリルはＡＲＭを抱き締める腕に力を込めた。
その時、地響きがして入り口とは反対側、少し向こうの床が崩れ落ちた。
下は空洞になっていたのか、破片は地のそこへ落ちていく。
ゴーレムの腕が落ちてきた衝撃に耐えられなかったのだろう、次々と床が崩れ始めた。
ほこらの入り口近くにいたレベッカから声が掛かる。
「ディーンッ！　危ないッ！　こっちッ！」

「ああッ！　大丈夫だッ！」

そうレベッカに声をかけ、アヴリルを見る。

「ここは危ないから。とりあえず、おとなしくしててくれよ？」

「はい……」

地面は次々と崩れ落ち、今から踏み出そうとする先にまでキレツが走る。

ディーンはアヴリルをしっかりと抱きかかえ、駆け出した。

（アヴリル……、今度はゼッタイ助けてみせるからな）

抱きかかえられたアヴリルの瞳からは、そのぬくもりが伝わったかのように、一粒の涙がこぼれ落ちていた。

「ディーン、大丈夫だった？　その人は？」

少し危なかったが、無事にほこらの入り口まできた。

崩落はおさまったようだ。

「ああ、ゴーレムの手の中にいたんだ」

「……」

アヴリルはまだ意識がはっきりとしていないのか、あまり反応が

ない。

「とりあえずは村に帰ろっか。話はそれからね」

「ああ、そうだな」

そう言ってアヴリルに手を差し出す。

「一緒に行こう」

「はい……」

その手をとり、アヴリルは一緒に外へ出た。

白い岩肌が露出した山道を歩き、３人で山を降りていく。

ディーンは道すがら、アヴリルに話しかけていた。

「この辺りは魔獣が出るから、けっこう危ないんだ。オレたちの村までくれば落ち着いて話しが聞けるから」

「はい……」

「……」

記憶を失っているアヴリルだが、初めて会った時より少しそっけない気がした。

疲れているのだろうか、そう思い声をかける。

「村に着いたらとりあえず休もうか。……それとも、疲れたなら少し休憩しようか？」

「いえ、だいじょうぶです。やさしいのですね？」

「……」

アヴリルに話しかけるディーンを、レベッカはなにか複雑な表情で見ていた。

「そんな事ないって。ちょっと元気がなさそうに見えたから……。ってレベッカ、さっきからどうしたんだ？」

「ディーン……、あのさ……」

少し言いづらそうにレベッカが話す。

「どうしたんだよ？　……まさか、さっきケガでもしたのかッ！」

「え？　さっきって？」

返ってきたのは、レベッカが話そうとしていた事とはまったく見当違いの返事だった。

何の事かと少し考える。

（さっき、って……）

ああ、ゴーレムの腕が落ちてきた時か、とすぐ思いついたが。

余計な事まで思い出してしまった。

顔が熱くなり、つい語気を荒げてしまう。

「違うわよッ！　……そうじゃなくて。ワタシが言いたいのは、いつまで手をつないでるの？　って事ッ！」

レベッカに言われ、ディーンは自分の手を見る。たしかにアヴリルと手をつなぎっぱなしだった。

「あッ！　ごめん」

レベッカの勢いに、つい謝ってしまい手を離すディーンだが、

「ってなんで怒るんだよ？」

なんでレベッカの機嫌が悪いかわからない。そのままの疑問をぶつける。

「怒ってないわよッ！」

「いや、怒ってるじゃん……」

普段からレベッカにニブチン、ニブチン言われているディーンだが、やっぱりニブチンだった。

そんな犬も食わない。もとい、割り込んだら馬に蹴られるようなやりとりをして言い争う2人に、アヴリルがいきなり、すっとんきょうな事を言いだした。

「あの……、おくさんにわるいですから、てをはなしてもらってもいいですよ？」

「「え？」」
２人の声が見事にハモる。
「おくさん、って……」
「ッ！」
アヴリルの言った意味を理解し、レベッカが頬を赤く染める。
「ち、違うわよッ！？　ワタシはディーンの奥さんなんかじゃないからッ！」
「そうなのですか？　おふたりとも、なかがよさそうなので。てっきり、ごけっこんされているのかと……」
「そんなディーンと結婚なんて……」
その嬉しさを隠すように手を胸にあて、赤くなった頬を見られまいと少しうつむく。
なぜかアヴリルに嬉しい勘違いをされてしまったようだ。
ディーンはどう思っているのかと、ちらっと見てみる。
「そうそう、レベッカとは結婚してないよ。そういう時は恋人に悪いから。って言わないと」
アヴリルの言葉に反論せずに、さっきから首をひねっていたディーンは唐突にそう言った。
「なッ！」

普段はしっかりもののレベッカだが、色恋沙汰にはめっぽう弱かった。
その思考回路は、まさに恋する乙女そのものだ。
（恋人って、ディーンってワタシの事そう思ってるの？）
ディーンの発言を聞いた恋する乙女なら、誰だってそう勘違いをするだろう。
レベッカも漏れなく勘違いした。
嬉しくなって舞い上がり、後先考えずに発言する。
「ディーン……あのね。ワタシもディーンのこと――」
「そう言わないと、わかりにくいボケになってしまうじゃないか」
レベッカがその思いを告げようとするが、ディーンの一言にさえぎられた。
「へ？　……」
呆気にとられるレベッカ。
わかりにくいボケってなによ、と思う。
だが、付き合いの長いレベッカはディーンの言わんとする事がわかった。
どうやらディーンは、アヴリルの言った事をギャグかなにかと思ったようだ。
それなら奥さんより恋人のほうがわかりやすいだろ、そう言いたいらしい。

あたふたしていた自分がバカみたいだった。
「――ッ！　この鈍感ッ！　ニブチンッ！」
そう言ってポカポカとディーンを叩き始めた。
「な、なに怒ってるんだよ。さっきから怒ってばかりじゃないか」
レベッカのポカポカを、腕で受けとめながらディーンは言う。
「ふふ、やっぱり。とてもなかがよいです」
アヴリルはとても懐かしそうにそう笑った。
あの別離からは考えられないような、とても穏やかな笑顔だ。
しかし、和やかな雰囲気になるにしては、レベッカが少し本気で殴ってきてディーンは少々痛かった。
「イタタ、ちょっとレベッカ。少し痛いって。いてッ！」
「ワタシの胸も痛いんだからッ！　そんなの知らないわよッ！」
そう言って。いろいろな、それはもういろいろで複雑な感情がいり混じって、ポカポカと殴り続けるが、
「――ッ！　レベッカッ！魔獣だッ！」
「え？　――」

ディーンの一言で、場の空気が一瞬で張りつめた。

To Be cotinued……

COUNT――3（後書き）

どうも、感想を依頼して未熟さを再認識して少し凹む、という自爆をした、あきかなです。しかし、これからもっと面白い作品にしていこうとやる気も頂きました。マグロ頭様には本当に感謝しています。これを読んで頂いている読書様（いるのかよ、というツッコミはなしで）良かった所やダメだった所を一言でも教えて頂ければ作品のコヤシになります。お気軽に感想をおよせ下さい。でも感想を催促すると読まれなくなる、とか聞いてちょっと心配です。まぁ気軽に作品を楽しんでもらえたら、それだけでも幸せな事なんだと思います。それでは、また読んで頂けるように頑張ります。

COUNT――4

レベッカに魔獣がいると声をかけ、ディーンは辺りの気配を探る。
三人で歩いていた道の先には崖があった。
十数メートル程の幅があり、大きな丸太が橋のようにかけられている。
その下から魔獣のうめき声のようなものが聞こえた。
ディーンは警戒しながら崖へ近づき、その鳴き声のする方へ視線をやる。
反対側の岩肌に、大きな魔獣が張りついていた。
レベッカが、銃のホルスターに手を当てながら声をかけてくる。
「ディーン、この辺りでは見かけない魔獣だよ。どうするの？」
レベッカの言うように、この辺りに住む魔獣にしてはかなり大型だ。
堅そうな殻におおわれた外見は、恐竜のようにも昆虫のようにも見える。
その大きさはディーンの3倍ほどの背丈があった。
その太い手足についた、鋭いかぎ爪で岩肌をえぐり、壁を登ってこちらへ移動してくる。
鈍く光るその目は、すでにディーン達をとらえており、今にも飛

びかかってきそうだ。

ディーンは相手の殺気を感じ、周りを確認する。
この辺りは木々もなく、そこそこ開けている。
白い岩肌が露出した地面もほとんど傾斜がない。
戦うのには適していた。

「レベッカはこの人を守ってくれ。あいつはオレが倒す」

後ろにいたアヴリルをレベッカにまかせ、スコップをかまえる。

「ちょっとッ！　あんな強そうな魔獣をスコップ1本で倒そうと思ってるのッ！？」

「大丈夫だって、あれくらいならＡＲＭがなくても楽勝だよ」

「ダメよッ！　スコップだけなんて――」

余裕の態度で話すディーンだが、レベッカはいくらなんでもそれは無謀だと思い、止めようとする。
そんなやりとりをする二人に、アヴリルが声をかける。

「……なら、これをつかってください」

そう言ってアヴリルは、抱えていた2丁のＡＲＭを差し出す。

「いいのか？」

「はい。それは、あなたがつかってください」

アヴリルの強い眼差しに、ディーンはその手に馴染んだ、懐かしいＡＲＭを受け取る。

銃身が極端に短い作りをしていて、手の平ほどもあるシリンダー部分から、弾が直接撃ち出されるような形状をしている。

コールドスリープに入る前のアヴリルが、ディーンの為に作った、大型のリボルバー式の銃だ。

ディーンは深くうなずき、

「わかったッ！　それじゃあ2人とも、下がっててくれ」

ディーンの言葉に、レベッカは少し呆れたように、アヴリルは静かに返事をした。

「しょうがないわね。まかせたわよ、ディーン。でもムリしたらダメよ？」

「むりはしないでくださいね？」

「おうッ！」

二人は来た道を駆け戻り、それを逃げ出したと思ったのか、魔獣がうなり声を上げる。

崖に張りついていた魔獣が、大きな爪で岩肌をえぐり、その巨体を宙に踊らせた。

「くッ！」

ディーンは魔獣の着地場所より後ろに飛ぶ。

半秒遅れて今まで居た地面が砕けた。
その重みで岩肌を割り、着地した魔獣が咆哮を上げる。
避けた勢いのまま魔獣と距離を取り、
「それじゃ、さっさと倒してやるぜッ！」
そう言って銃を前にかかげ交差させる。
ＡＲＭのグリップが剣のように伸び、ちょうど逆手に剣をかまえたようになる。
地面を後ろに蹴り、前に飛び出す。
たしかに見た目は強そうな魔獣だが、前回の旅で戦ってきた強敵などとは、比べるべくもない。
アヴリル謹製のＡＲＭがあればなおさらだ。
久しぶり、と言ってもわずか１日ほどだが。
ＡＲＭを使える戦闘が懐かしかった。
気分が高揚してくる。
ディーンの眼前に狭った魔獣は、鋭い爪で獲物を引き裂こうと大きな腕を振りかぶった。
しかし、後ろへ退かない。
大降りな攻撃の、その軌道の先を読み、あえて間合いに飛び込むように勢いをつける。
その爪が自分にふれる瞬間、スライディングでかわした。
頭のすぐ上を腕が振り抜かれ、風圧に髪がなびく。

と同時に岩肌のふくらみに足をかけ姿勢を立て直す。
次の一歩で強く地面を踏みしめ、空いた懐に銃の刀身部分を叩きつけた。

「グォォォォッ！」

勢いを乗せた渾身の一撃に、魔獣をおおう堅い殻が砕け、刀身がその身に食い込む。
魔獣は頭を振り上げ、地の響くような叫びを上げた。

「すごい……」

その流れるような動作で魔獣の攻撃をよけ、一撃でひるませた。
ディーンの意外な強さに、いや、戦い慣れした動きにレベッカが感嘆の声を上げた。

ＡＲＭなんて扱った事がなく、死闘など経験した事もないディーンに、あんな動きができるはずがない。
先ほどの動きは、戦闘経験がものを言う“読み”や勘などが洗練されている戦い方だ、ならば……。

しかし、レベッカがその強さの結論を出す前に、ディーンが動いた。

一発の銃声。
懐に飛び込んだ超至近距離、そこから砕けた殻の間に銃を向け、ディーンが撃った。

続け様に連続した発砲音が鳴り響く。
ディーンは息もつかせぬ早撃ちで、魔獣にＡＲＭを全弾撃ち込ん

でいった。
魔獣の体を覆う殻と、薬莢が辺りにはじけ飛ぶ。
弾を撃ち尽くし、銃口から煙が上がる。
さらに、間をおかず、ディーンは前傾姿勢になり腕を後ろに引く、二丁の刀身を逆手に構えた。
強く一歩を踏み出し、止めとばかりにX字に切り上げる。
「グォォォォォッ！」
ディーンの猛攻を受けた魔獣は、体の芯まで響いてくるような絶叫を上げ、崩れ落ちた。
見た目にも、明らかにこの辺りの魔獣とは違う、その強さも見かけ倒しではないだろう。
しかし、宣言した通り本当にあっという間に倒してしまった。
その強さは異常だ。
レベッカはディーンに歩みより、疑問をぶつけた。
「ディーン……。アンタそんなに強かったっけ？」
「このＡＲＭのおかげさッ！　ありがとなッ！　アヴリルッ！」
邪魔にならないよう離れていたアヴリルに、手を振り声をかける。
ディーンに届くように、少し声を張りアヴリルが答える。
「いえ、おやくにたったようでよかったです。……でも、なぜわたくしのなまえを、しっているのですか？」

「あ……」

久しぶりのＡＲＭの感触に気持ちが高ぶり、思わず名前を言ってしまった。

まだアヴリルが名乗っていないのに知っているのは明らかにおかしい。

ディーンは、なんて答えればいいんだ、と頭を悩ませる。

が、レベッカが突然飛び付いてきた。

「ディーンッ！　危ないッ！」

「うわッ！」

レベッカに体当たりされ横に飛ぶ。

すぐ目の前を炎のカタマリが走った。

「キャッ！」

炎は２人をかすめ、一緒に横に飛びずさったレベッカが悲鳴を上げた。

先に倒れていたディーンの上にレベッカが折り重なる。

ディーンがレベッカに目をやると、足の太もも辺りを押さえ苦悶の表情をしていた。

「うぅ……」

「レベッカッ！　くそッ！」

一瞬で倒してしまい忘れていたが、たしか前に戦った時も口から炎のカタマリを吐き出していた。
後ろで崩れ落ちていた魔獣の口は開かれ、端から煙が上がっている。

ディーンは止めをさしたつもりだったが、甘かったのだ。
過去に戻った体では、力が弱くなっている。
虫の息だが、まだ魔獣は生きていた。

ディーンは倒れた体制のまま、素早くレベッカの腰にあるＡＲＭを引き抜く。
魔獣は口の端から炎を漏らし、次を放とうと頭を振り上げた。

その炎が放たれる寸前、魔獣の傷口をＡＲＭの弾丸が貫いた。
炎は魔獣の頭を包み、断末魔を辺りに響かせ、魔獣は今度こそ絶命した。

「おふたりとも、だいじょうぶですか？」

倒れたままの二人に、アヴリルが駆け寄ってくる。

「ああ、オレはケガしてないけど。レベッカ、大丈夫か？」

ディーンは、自分の胸の上でうずくまるレベッカに声をかける。

「大丈夫って言いたいけど。ちょっと痛いかも。ッ――」

そう言って顔をしかめるレベッカを抱き起こし、押さえている足

を見てみる。
太ももの中ほど辺りに、ひどい火傷を負っていた。
「レベッカッ！　くそッ！　オレが油断したからッ！」
慌ててポケットからヒールベリーを出し、潰した実を傷に塗って手当をする。
「ッ――。ありがとう。……って、どこ触ってるのよッ！　ディーンのエッチッ！」
火傷の手当をするため、レベッカの足を手で押さえている。
ディーンの指は太ももの内側に少し入り込んでいて、たしかにちょっときわどい場所だった。
レベッカは恥ずかしがって立ち上がろうとするが、
「イタッ――！」
「ほらッ！　そんな事気にしてる場合じゃないだろッ！　いいから動くなッ！」
「う、うん」
ディーンの迫力におとなしくなるレベッカ。
しかし、そんな所に手をやられては顔から火が出そうになる。
自分で手当すればいい話なのだが、まったく頭が回らない。というか頭が真っ白だ。

包帯を巻かれる時も、手が太ももの内側に入り込んでくる。
胸はドキドキしっぱなしだった。

手当が終わり座り込んだままのレベッカは、まだ頬を赤く染めていた。

さっきはディーンを意識し過ぎてどうにかなってしまいそうだった。
いけない妄想を振り払い、なんとか平静を保とうと必死に頑張った。

それはもう涙ぐましい努力だった。
意識を他に向けようと、昨日読んだ小説でも思い出そうかとすると。
昨日はちょうど主人公とヒロインが感動の再会を果たし、抱き締め会うところまで読んでいた。
ワタシももっとディーンに抱き締められたいな、と考え。
慌てて妄想を振り払い、それならばと今日の晩御飯でも考えようとすれば。
そういえば、ほこらで押し倒された時はディーンに食べられちゃうかと思ったな、と考え。
まったく効果がなかった。

そんな事を考えていたので、まともにディーンの顔が見られず、目をそらし礼を言うレベッカ。

「あ、あの。ありがとう」

「いや、オレこそレベッカが助けてくれなかったら危ないところだった。ありがとう、レベッカ」

膝をついているディーンは、レベッカの肩に手を置いてきた。

「い、いいわよ。別に」

プイッと横を向く。

その手が置かれただけで心臓が飛び上がりそうになった。

今日はドキドキさせられてばかりだ。

「それじゃ、レベッカ。はい」

そう言って、ディーンはレベッカに背を向けてしゃがみ込んできた。

どうやら、おぶされという事らしい。

「ひ、ひとりで立てるわよ」

そう言って足に力を込めるが、

「イタッ――！」

「ほら、ムリすんなって。ケガしたのはオレのせいなんだし。遠慮しないでいいよ」

「いや、遠慮なんかじゃ――」

別にディーンに遠慮してる訳ではない。

今日はディーンにトキメかされてばかりだ。
このままディーンの背中に体をあずけてしまっては、勢い余って今度こそ告白したりしてしまいそうだ。

しかし、ディーンに抱きついて、また、あの幸せな時間に身をゆだねたい、という気持ちもある。
どうしようか、と悩むレベッカに、アヴリルが優しく声をかけた。

「おふたりとも、ほんとになかがいいですね。おにあいですよ」

「そんな――」

そんな嬉しい事を言われては、ますます意識してしまう。
レベッカがタコだったら、今日だけで１００回はゆで上がっているだろう。
それくらいレベッカの乙女心はのぼせ上がっていた。

「ほら、早くしないと村に着く前に日が沈んじゃうぞ」

そうディーンがせかすので、レベッカはしぶしぶ背におぶさる。

「それじゃ、行くか。アヴリルもな」

「はい」

ディーンはそう言って立ち上がり、村を目指した。

背負うディーンの手が、太ももについた火傷をよけてレベッカのおしりの近く、ショートデニムからのぞく素肌に触れていたが、もうとっくにレベッカの頭はパンクしていた。

あぁ、ディーンにそんなところ触られちゃってるぅ、と思うだけで。
文句を言うほどの理性は残っていなかった……。

「アヴリル。なんか、ほったらかしにしてごめんな？」
せっかく再会したのに、アヴリルとあまり会話できていない気がして謝る。

ディーンは村に向かって歩きながら、アヴリルと話していた。
もう少しで村に到着するだろう。

辺りは赤く染まり、荒野の先、地平線には綺麗な夕焼けが見える。
レベッカはディーンの背で静かに寝息を立てていた。

最初はその背中で、ピンク色の世界に旅立ちこの世の天国をあじわっていたが。
今日の出来事はレベッカの乙女心には刺激が強すぎたようで、疲れて眠ってしまった。
夕焼け色のレベッカの寝顔はとても幸せそうだ。

そんなレベッカに目をやり、アヴリルは言った。

「いえ、かまいません。おふたりをみていると、とてもやさしいきもちになりました」

「そっか、ありがとう。アヴリル」

礼を言われたアヴリルは笑顔になり、
「どういたしまして」
そうディーンに笑いかけた。
「でも、どうしてわたくしのなまえを、しっているのですか？」
「え？　なんでだろうな？　ただそんな感じがしたから……」
三人を包む柔らかい空気に、ディーンはなんとなく答えた。
アヴリルは少し驚いたような、呆れたような顔をして返事をする。
「すごいぐうぜんですね」
ディーンは苦笑いをした。
ＡＲＭのおかげでつい名前を言ってしまったが、とＡＲＭの事を思い出し。
このまま借りっぱなしというのは悪い気がして、アヴリルに聞いてみる。
「あ、それとＡＲＭ借りっぱなしだったっけ」
「いえ。それはあなたが、つかってください。ディーンにさしあげます」
「えっと……、いいのか？大切な物なんだろ？」
「かまいません。それはあなたにもっていてほしい。ただ、そんな

かんじがするのです」

そうディーンのマネをして、アヴリルは微笑んだ。

つられてディーンも笑顔になる。

「そっか、それじゃもらっておくよ。ありがとう」

「はい」

真っ赤に染まる3人はとても幸せそうだ。

次元の乱気流に巻き込まれ、アヴリルと別れてしまった時はどうなる事かと思ったが。

やっと、またアヴリルが笑える日がきた。

ディーンは、とりあえずでも、それが嬉しかった。

そんなディーンの背に揺られ、幸せそうな寝顔をしているレベッカは、周りには聞こえないくらいの寝言をこぼす。

「ディーン……、もうひとりで行っちゃたりしないで……」

そう言って、ディーンの肩にかけられていた手に、少しだけ力が込められた。

To Be cotinued……

COUNT――5

「うぅん……」

レベッカは、窓から差し込む朝日で目をさました。
田舎の家にしては小綺麗な部屋だ、木製の窓の外からは鳥の鳴き声が聞こえる。

レベッカは、ベッドの上で爽やかな萌木色の毛布に包まれている。
パジャマの袖から指を少しのぞかせて、まだ眠たそうに猫の手で目をこすった。

いつもはみつあみにしている長いオサゲはほどかれていて、ゆっくりと体を起こすレベッカの肩から、その長い髪が川のきらめきのように朝日を反射させて流れ落ちていった。

体を起こしたレベッカは、可愛らしいアクビをして片手を上げ、大きく伸びをしながら目を開けた。

「う〜ん……、よく寝た。ワタシいつのまにベッ、ド、に……」

すがすがしい朝の目覚め。
レベッカの寝起きはもとから良いほうだが、今日はとくに意識がはっきりとした。
というか、はっきりを通り越して停止してしまった。

看病でもするかのように、ディーンが横にいたからだ。
椅子に腰掛けて、ベッドにうつぶせになって寝ている。

レベッカには、なんでディーンがこんなところで寝ているのか、ちっとも、サッパリ、これっぽっちもわからなかった。
しかも、いつのまにか自分の服が変わっている。
ピンクの生地に黄色のハート柄がついた、愛用のパジャマを着ていた。

「……。まさか、ディーンが着せ――」

レベッカはそこまで考えてベッドに倒れ、また眠りについた。
正確には、眠っている自分の服をディーンが脱がせていくところ、を想像して気絶しただけだったが。

第2章『薄い影と影響を与えたモノ』

「ん？　はぁ～。もう朝か」

レベッカがベッドに倒れた衝撃で、今度はディーンが起きた。

「……レベッカはまだ寝てるのか。今はけっこう寝坊助なんだな」

あいにくと、「それはアンタのせいや」と突っ込んでくれる便利な人はいないので、ディーンはそのまま勘違いをする。

ぐっすりと寝ている？レベッカを見て、ディーンは幼い頃の事を思いだした。
昔のレベッカは怖がりで、よく一緒に寝てくれとせがまれたなぁ、なんて思う。

あどけない寝顔は、その時の面影が残っていた。

（まぁ、寝ててくれて、ちょうどよかったかもな。起きてオレが隣にいたりしたら、なんて文句を言われるか……。それに、昨日はけっこうひどいケガさせちゃったし。ゆっくり休んでくれよ。ごめんな、レベッカ）

心の中で声をかけ、レベッカを起こさないよう静かに部屋を出る。
かかっていた毛布が、なぜか半分ほどめくれいたのでかけ直しておいた。

「おはよう、おばさん」

ディーンはキッチン兼リビングに行って、レベッカの母親に声をかけた。

４人掛けのテーブルと、壁際には木製の台所がある。
そこで朝ごはんの用意をしながら、鈴が転がるような声でレベッカの母親は返事をする。

「あら、おはようディーンちゃん。あの子はまだ寝てるの？」

可愛らしいハート柄のエプロンを着ているその姿は、２０代と言っても通用するだろう。
レベッカの親だけあってその整った顔立ちは美人の部類に入る。
レベッカはその母親よりも綺麗な顔立ちをしていて、美少女と言って差し支えないのだが。
ディーンは当然、そのあたりには無頓着だった。
寝ているかと聞かれ、さきほどレベッカの寝顔を見た時と同じ事を思い、ディーンは返事をする。
「ああ、昨日は大変だったし、ケガもしてるから……。おばさん、ほんとにごめんなさい」
「そうね、ちょっと心配したけど。そんなに気にしないでいいのよ？　好きな人を助けるためにその身を投げ出すなんて、ちょっと憧れちゃうわ。ふふ」
そう言ってコロコロと笑う母親に、後ろから、映画俳優のように少し気取った、若い声が掛かる。
「母さんッ！　そんな簡単に許してしまったら、私が『娘をキズモノにするなんてどうしてくれるんだ？　責任はとってくれるんだろうね？』って言ってディーン君を婿にもらう計画が台無しじゃないかッ！」
ディーンの後ろから、いきなりレベッカの父親がぬぅっと出てきた。
なにか不穏な事を言っている。

「あらあら、そんな事してもレベッカから嫌われるだけですよ？
それにキズモノって、ディーンちゃんがちゃんと手当してくらたからアトなんて残りませんよ」

「しかしだね、――」

いきなり夫婦の会話が始まって、間に入れないディーン。

ちなみにレベッカの父親も美形な部類に入る。
たまたま美形が多い田舎があったりするが、カポブロンコもそうかもしれない。

ディーンは幼い頃に親を亡くしてしまったので、それからはレベッカの両親がディーンの親代わりをしていた。
特に父親のほうはディーンがお気に入りで、昔から「君にならレベッカをまかせられる」と豪語しては娘に怒られている。
どこかの物語に出てくるバカ親。もとい、親バカのお父さんみたいだ。

「はいはい、それより朝ごはんにしますよ。ディーンちゃんはレベッカを起こして来てくれる？」

「え？　でもずいぶん前にオレが起こしに行った時は、レベッカにめちゃくちゃ怒られたけど……」

数年前くらいだろうか、いつものように朝ごはんをお呼ばれに来たディーンだったが、たまたまレベッカが寝坊していた。
今のようにおばさんに頼まれてレベッカを起こしに行ったが、起きた途端怒りだし、枕やら本やら投げつけられた。

そういえば、その頃からレベッカが凶暴になり始めた気がする。
あの時は3日も口を聞いてくれなかった。

「う～ん、そうだったわね。でもきっと今だったら大丈夫よ？　きっとあの頃は自分の気持ちがよくわからなかったんでしょ」

「え？　気持ちって？」

「ふふ、それは乙女の秘密よ。ほら、そんな事言っている間にごはんが冷めちゃうわ」

「そうだぞ、ディーン君。父親のわたしが許可するから、レベッカの寝顔を存分に堪能してから起こしてくるんだ」

二人ともレベッカをほうっておいて好き勝手な事を言う。
それもレベッカを応援しての事なのだが、本人からしてみれば迷惑だったらしい。

「パパッ！　なんて事言うのッ！？　それにママもッ！　なんでそんな事わかるのよッ！」

パジャマ姿にストレートの髪型をしたレベッカが、キッチンに乗り込んできた。

ディーンが行ってしまった後ですぐに起きて、さっきのは夢よね？　と思おうとしたのだが。
ベッドの横にある椅子を見て、危うくまた気絶するところだった。

よくよく考えれば、自分の家なのだからパジャマを着せたのは母親だろう。

しかし、ディーンにその無防備な寝顔をさらしていた事は変わらないので、どっちにしろ恥ずかしかった。

今まで部屋で悶々としていたのだが、ずっとベッドにいるわけにもいかない、決心してキッチンまできた。

だが来る途中で顔を洗うのも忘れない。

いくら寝顔を見られたからと言っても、想い人の前では少しでもキレイでいたかった。

「おはよう、レベッカ。足は大丈夫なのか？」

2人に怒っているレベッカに、ディーンが心配して声をかける。

「え？　う、うん。大丈夫よ……。その……、昨日はありがとう」

2人を怒っていた勢いはどこへやら。

ディーンに話しかけられた途端、頬を染めてシュンとなり、手をモジモジしている。

どうやら最近の出来事で、レベッカの乙女スイッチが入りやすくなってしまったようだ。

ちょっとディーンに優しくされるだけでドキドキしてしまう。

「オレこそごめんな、レベッカ。……これからはケガなんてさせないように、オレが守ってやるよッ！」

そう言って親指を立ててグッとコブシをつき出す。

レベッカの乙女フィルターを通したディーンの笑顔は、白馬の王子様に見える。

親指を立てる王子様なんて見たことないが。

「い、いいわよ。ワタシだって戦えるんだし。ディーンに守ってもらわなくたって……」

本当は、ディーンがそんな事を言ってくれるなんて、と嬉しくて飛び跳ねてしまいたいのだが。

つい、いつものように意地を張ってしまう。

「なに言ってるんだよ、昨日はレベッカが守ってくれたんだから、遠慮すんなって」

そう言われ、レベッカは反論を諦めて、顔が赤くなっていくのを感じながら伏し目がちにディーンを見つめ、そよ風のような小さな声で返事をした。

「……。うん、ありがとう」

そんな初々しいやりとりをしている2人に、完全に蚊帳の外にされた両親は、某野球少年のお姉さんのように部屋の入り口の影から温かく見守っていた。

「あらあら、ディーンちゃんには大人しいのね」

「ハッハッハ、まるでわたし達の若い頃を見ているようだね」

そう言ってレベッカの成長を嬉しく思う両親だった。

ちなみに、アヴリルは両親の部屋で、まだぐっすり寝ていた。

父親はもちろん部屋を追い出され、昨晩は床で寝るハメになった

が。

To Be cotinued……

COUNT――5（後書き）

はい、更新遅れました。投稿する時は章単位で9割ほど完成させてからにしてるんですが、今回は2章の最後が難産でした。まだまだ下手っぴですが、少しでも良いものを、と頑張っていますのでどうかご勘弁を。設定資料集に文庫本とそろえたのですが、レベッカの両親ってキャラとして出てこないですね、勝手に作ってみましたが、いかがでしたでしょうか。それでは、また読んで貰える様に頑張ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1554h/

ワイルドアームズ５〜the out of infinity〜

2010年10月11日15時25分発行